

はじめに

学校長 宮川正美

昭和63年から研究テーマを「発達と障害に応じた教育をめざして一からだづくりを通して」と設定し、実践を重ねてきたが、研究をすればするほど奥が深く、課題も出てきたので、4年をもって一応の締めくくりとした。

すべての力のもとになる「からだ」そのものをつくる研究の取り組みの方向は誤りではなく、日頃の授業実践の中にも組み入れかなりの成果をあげてきたと思っている。しかし、実践を積み重ねていくうちに、何か欠けている部分のあることに気づき、研究部を中心に、全教官が協力してこの欠けている部分の模索が始まった。議論を重ねる中で、本校児童生徒の最も弱い点の1つにコミュニケーションにおける力不足が問題点としてあがってきた。すなわち、表出言語があるなしに関係なく、現在の社会で生きていくためには何らかの手段を用いて、相手にわかってもらえるような意思表示が必要になる。特に、本校のめざす教育目標である社会的自立を達成させるためには、このことがぜひ緊急に取りあげられねばならぬ課題であると考えた。

初年度は、本校の児童生徒がどの程度言語やコミュニケーションの力を持っているのか、コミュニケーションに関する実態把握に努めた。それらの結果をふまえて、主題はそのままにし、副題を「コミュニケーションに視点をあてて」とかえ研究に取り組むことに決まった。

本校でもかつて、正しく話す力をつけさせる意味で、表現化に視点をあてた取り組みがなされたことがある。しかし、今回は言語による表現化に限定せず、一歩進めて、非言語でも相手に何を伝えようとしているのか、また、聞き手側も話し手の立場になってよい聞き手になるためにはどうあるべきかなどいろいろな研究がなされてきた。

本校の生徒が卒業後、社会へ出て積極的に相手とのコミュニケーションがとれるようになるためには、どのような教育を行えばよいのか、また、本校の児童生徒のめざすコミュニケーション像に迫るための授業づくりに工夫が施され、実践がくりかえされてきた。そのことによって徐々にではあるがコミュニケーションの力がつきつつあると思われる。

今年は2年目に当るので、このような取り組みでよいのか、もっと有効な実践方法があるのではないのか、ご批判を頂きたく、鳥取県内を対象に研究発表会をもたせていただいた。それらの批判を糧にして、ぜひ社会で生かし使える力にさせたいと考えている。

最後になったが、今回も鳥取県教育委員会、鳥取市教育委員会、鳥取県盲・聾・養護学校長会、鳥取県心身障害児教育研究会、鳥取県東部地区心身障害児教育研究会、鳥取市小学校教育研究会、鳥取市中学校教育振興会から研究発表大会のご後援を頂いたことに対し、また、鳥取大学教育学部教官にご協力頂いたことに対し深く謝意を表したい。